

2019年1月24日（木）

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん WS 屏風『扇の草紙』—詩のクライマックス—

1,12 回目のご来館

マクミランさん 12 回目のご来館（1 月 24 日）では、和歌を専門とする若手研究者・岡本光加里さん（東京大学大学院）をお招きし、前回に引き続き屏風仕立ての『扇の草紙』についてのワークショップを行いました。

また将来的には、凸版印刷株式会社さんと共同で、マクミランさんの翻訳を活用したデジタルコンテンツの開発を目指しているため、凸版印刷さんのお二人にもワークショップに参加していただき、和歌の翻訳をすることで、どのようなことが見えてくるのかについて一緒に考えてゆくことにしました。



2, 詩のクライマックス

「桜ちる木の下風はさむからて 空にしられぬ雪そふりける」（三つのうち上の扇が対応）。



まずは岡本さんにこの歌を解説していただきます。

「空にしられぬ雪」＝空が知らない雪。つまり普通の雪ではないのです。雪に見立てて詠われているのは、木の下に散っている桜なので、実際には寒くなくて空に知られていないのです。

2019年1月24日（木）

岡本さんの現代語訳は、「桜の散っている木の下を吹く風は寒くなくて、空の知らない雪が降っているよ」というものでした。

花を雪に見立てるのはそれほど珍しくない発想なのだそうですが、岡本さんはこの歌の眼目は別にあるのだと説明してくださいました。それは、見立てを説明する理屈の表現に「木の下風は寒からで」「空に知られぬ雪」と、天象の常識から全く外れた表現を選択したことではないか、ということです。このことにより、その木の下だけに現実世界を超えた、特別な時空間を成立させることに成功しているのではないのでしょうか、と解説してくださいました。

英語ではいつもクライマックスが求められるというマクミランさん。この歌のうち、岡本さんも見所だと指摘しておられた「空に知られぬ雪」という箇所をクライマックスにした訳を提案してくださいました。

The wind that is blowing
Be neath the cherry blossom tree
Is not could at all
And the blossoms that fall
This snow has never known a cloud.

五行目は「雪が雲を知らない」として、雪の気分になってみせ、よ

り私的な表現を目指しています。もとの和歌は空なので「sky」でも良さそうですが、示す範囲が広すぎると感じ、より具体的で視覚的な「a cloud」（赤字）を選択されたそうです。

空に知られていない、とするよりも、雪を主語にする方が英語にした時にじっくり馴染み、なおかつ優美になるとのことでした。

細部を変更して英語の詩として成り立つよう工夫しておられますが、全体的な効果は元の和歌と同じになっています。このような方針は、マクミランさんがとても大切にしておられるところで、より良い訳を検討する過程を一緒に体験することで、よく理解することができました。

